

エゼキエル書 34 章 11-17 節

コリントの信徒への手紙一 15 章 20-28 節

マタイによる福音書第 25 章 31 節～46 節

本日は、教会歴では、2023年聖餐式聖書日課 A 年聖霊降臨後最終主日です。来週から教会歴が変わりますので、降臨節前の主日であり、キリストによる回復と題された主日でもあり、王なるキリストの主日でもあります。

そのような中で、教会の暦では一年の最後に、わたしたちは王なるキリストをもう一度意識するように促されます。それは、わたしたちが真摯に仕えるのは、力に基づいた強い王ではなく、十字架の死という弱さにおいて働かれるキリストに他ならないことを、もう一度自覚するためです。

イエス様がそのような王であることは、『聖書（旧約）』にも前提があります。本日の旧約日課エゼキエル書に、「**牧者がその群れを散らされたときに自分の群れを捜し出すように、私は自分の群れを捜し出す。私は彼らを、雲と密雲の日に散らされたあらゆる所から救い出す**」（エゼ 34：12）とあります。主なる神様は、全知全能であり万物の創造者であり、王以上の存在ですが、イスラエルに対して忍耐強く待ち続け、イスラエルの世話をする羊飼いでもあります。力で羊を押さえつけるのではなく、あちらこちらに道を迷ってばらばらになってしまう身勝手な羊たちを、養い守る方なのです。そして、その羊飼いとしての役割は、イスラエルにとどまりません。すべての人間に向かいます。そのことは、『聖書（旧約）』では、間接的にしか示されていなかったといえるのですが、イエス様を通して明確にされたのでした。

さて、本日の福音書は、内容的に明確であると同時に少し恐ろしい箇所です。人の子であるイエス様が、世の終わりの時に栄光の座について審きを行う個所であるからです。羊は右で救われる側、山羊は左で救われない側、なぜ羊が救われて、山羊がだめなのか、なぜ右側がよくて左側はだめなのか、細かい説明はありません。ただし裁かれる理由は明確です。「**そこで、王は答える。『よく言っておく。この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである』**」（マタイ 25：40）そして、「**そこで、王は答える。『よく言っておく。この最も小さな者の一人にしなかったのは、すなわち、私にしなかったのである』**」（マタイ 25：45）とあり、「いと小さきもの」に何をしたか、しなかったかということが基準にあるからです。この審きを行うイエス様のイメージが、王なるキリストとされる所以です。また、「いと小さき者」と関係している点が、単なる力を振るう王ではないことを示しています。

さて、この「いと小さき者」という存在は、教会の歴史において、また現代においても大きく取り上げられる概念です。ことにキリスト教がローマ帝国の国教になってからは、社会の倫理の課題の一つになったといえます。それゆえ、教会は、「いと小さき者」に対して何をするのか、そのような問いが、活動の課題

とされ、ことに現代的表現では宣教の課題として、いつも話題になるといえます。そして、そのような議論において、「いと小さきも」のとは、教会の内外関係なく考えることが前提となっていると思います。

そのような「いと小さき者」という概念ですが、マタイ福音書および初代の教会は、どうであったのかを考えますと少し異なっています。福音書の記者も、その読者たちも、そして初代教会の方々も、「いと小さき者」という概念を、教会の枠の中だけで考えていたからです。それは閉鎖的にも思えてしまうのですが、そうではありません。状況が違うからです。『聖書（新約）』が書かれる時代の教会においては、社会の問題に対応する力がまだ教会になかったないということもあるのですが、社会の問題に関与することは、ローマ帝国内の社会秩序を変えることであり、それはローマへの明確な反乱にもなります。それ故、教会は、社会を変えるのではなく、教会の中の人間関係においては、世俗の力ある王を崇めるのではなく、十字架で自分たちを最後まで愛して下さったイエス・キリストを王として崇める交わりに徹しようと考えたのです。だからこそ、「いと小さきもの」という概念そのものが生まれたのです。教会の外に存在する「いと小さきもの」を無視することでは決してなかったと思いますが、まず教会の中で、「いと小さきもの」が無視されることがあってはならない、苦しんでいる人が無視されてはならない、無視する場合は、たとえ信仰があったとしても最終的な審きに結びつく、マタイ福音書のイエス様はそう警告しているのです。教会は、社会の「いと小さきもの」を、政治的あるいは経済的に救うような力はないが、同じ信仰者として、「いと小さきもの」を大切にす教会の交わりから、主なる神様の愛が広がり、世界が変わっていく、そのように考えていた。その歩みが、終末に向けた教会の歩みであり、その歩みを主なる神様が支えてくださると考えていたのです。現代は神学的に、主なる神様がまず先に教会の外の事柄に対して、愛をもって関わる歩みをされているとも考え、教会がその歩みに参与すると考えますが、そうだとすても、教会の中で「いと小さきもの」が無視されることはありません。現代はその両方を考えなければならないのです。

先週、教区会がありました。いくつかの議題の一つに、教区の財政的な事柄に関する問いが出され、様々な面で根本的な構造改革が必要であることも明らかになりました。これは日本聖公会東京教区という教会内部の問題であり、教会の外の「いと小さきもの」に関する事柄ではありません。しかし、そうであるがゆえに、経済的な問題を根本的に解決しようとする教会の歩みが、単に財政的な力関係に終始し、「いと小さき教会」を無視することがあるとするならば、そこに主なる神様の支えがあるとは思えません。もちろん、今のまま何も変えなくてよいということはありませんが、祈りつつ、交わりを深めつつ、考えることが大切です。わたしたちは私たちの教会として、歩み方を考え、わたしたちが属する東京教区の歩み方を考えたいと思います。一般の社会とは異なる歩み方を考えたいと思います。そのヒントとなる事柄も、イエス様の言葉にある「いと小さきもの」という言葉にあります。来週から新しいとして始まります。その年の歩みの中にも、主なる神様の支えがある歩みを続けていきたいと思ひます。